

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4



尚古堂



用捨竹下之卷

柳亭種彦編

一 うなぎ 芹の山

今ふのゝ翻語そとある事をぐりをあといひ。をまぐり。を。ぐりをまとひてのゆえ
難きより出て言前後いふせんごか一義きをよきする辟言へきごんへふりひくすが轉てんじて彼立かれたて
翻語ふりごんとるをうへりやうり
俳諧破邪顯正 延宝七年印本 松月庵隨流著ふゆ曰「清水の游まよを。游まよれ
清水をうらのゆを。作意つくひもするべ。祇園林ぎおんりんを。林祇園ぎおんを。林林りんりんを。中是ちゆうぜい略是りやくぜい」
連歌うたや。芹せりの山さんそ大きふよらぶ俳諧はいげいあて。ぐりをまとひ。こゆり。山さんの芹せり
も芹せりのいとひひへ義ぎを。まよ。まよ。ぐりをまとひふ同ひとシ

暮繁集

万治三

住吉あそ

蛤はまぐりのぐりをまとひそ水みずの月つき立たつ園ゑん

小町おとこまち踊おど三

ゆりかひも何ぐらさまの生身魂 宗因

立園の匂ひ空よりずき月を水中より見るをゆひ。宗因は少くよきじとあひがひも
ゑき老の身の残りとゆふ。是翻語ある意が近い。又能譜良杖元禄十年刺繡水撰ふ人人
まみ松ふひうろすの日かる」とうふ行助が句を引く云ひ條ふ「歌ふ老病うき」
どひ詩や客情くわうじやうとそ嫌さうら。連歌うた此格くわくを兼載けんざい芊せんのふとく
紫しひあはづるとゆ」ふどの事あれど。今の人うつすまひひて芊せんのふとくかはす

二 浄瑠璃本刊行の初

其角かくが著ちよ焦尾琴じょうびきんふ「童謡歌舞のりあへを思ふ明暦年中の双紙さうし
登八鷹下のぼりハ鷹たかとひをやりる事こと十二段じゅうにんふ分わけうるべり六字ろくじ南無右鷹なんむう

正本と奥書おくがきとゆること教奇すきの名なふあれよる雅よあべれ」とゆり其角かく

用捨箱うようばこ下一

寛文元年の生年まき幼おさな是等あれらの草紙くさがみを鬻弄めいろうと思ひりで當時の好事の
者もの南無右鷹なんむうの名なとかりそ。かく奥書おくがきを記きしるんとひとひ。又縹年代記ひう
井上市郎いちじゆろう後ご前まへの淨瑠璃じょうるりの刷さく本ほんみうやくさうふ記きせり。此市郎いちじゆろうは
明暦万治頃めいりくばんじごの人ひとなり。今傳つたれる細書ほそがき画入ゑりの淨瑠璃じょうるり本ほん。宇治の姫ひめ。鑑かがみ。
贊さんの類るいをぞく明暦万治の年号ねんごうよりて、それよき古遠きのほ。繰年代記くぢの淨瑠
璃じょうるりの作者しょしやくもうち交まわやまわ西澤一風にしづかいつうの著あつられが此說せつふあきがいたるを友人雑波よしの
其樂子笑わらひわらひハ鷹たか一冊かくを贈もられよ。寛かん永えいふたも刷さく本ほんを初はじて知しる
。段目だんめい記きるも標題ひょうだい道行どうぎやう此段だんの

山坡國住人六字南無右鷹門正本

ヤー風みらひ 一 脱 目

まくもそくらぬまじい花のまやうをひそむに包まれ
はまくわのくとまくりやまくとくわのひくからもく

本文小用
なけれども
首尾と画
一葉と摸生

全文總て
舞のまち
のあわせ
あり



○此草紙の義經が奥州及羽州より佐藤莊司が許を訪ね小吏を記せり。
下山やまとは是き。矢牆へ坐羽園由利郡の地名。西海の屋島山のゆゑ

用捨箱下二

上の卷小
四段あり
十二段を
三冊小築す
あり

寛永十六年正月吉日
大和右衛門の印之

上十

此六字南無右衛門の事あき草紙ふるべられ彼不幸ゆて其書を得て唯
ゆくかく東海道名所記小淨瑠璃の京の次島夷とくらひ四條川原あて篠田政清が事をかくして人形を
と受領一西の宮の東かくとくらひ四條川原あて篠田政清が事をかくして人形を
ゆくかく。其後どうの姫阿弥院の胸割みどりの事をかくする。次河内左内とく
者出く。女も南無右衛門。左門。どうたか。をと淨瑠璃とくらけ入古郷飯
江戸咄貞享三年印本淨瑠璃の起りの云々の条「京田舎遠園端傳」をもとぞりける程
ふ四條川原あて芝居をたて六字南無右衛門とりへる女ちまかうけるをき十二段
おかりかたや人の少あれてめづしかざるとそ。舞ふまよ。やま。高館曾我をじと

彼かれかくらりとゆるを見ゆて女めの事ことをかかるむ傳つた系けい未み考こう
 西鶴大久敷にしつるだいくふ延宝えんぽう年ねん味み
 ふ「淨瑠璃やうきの風の末の段」とくらふ「念願六字南無右夷とく」と附つけ又同
 人作の讀本三十不孝じゅうさんふこう貞享三じょうじょうさん年印本ねんいんほんふ
 西鶴にしつる現在の頃まで彼かれがくらし曲節まげきの傳つたわらてくらし欲ほ惜さく羅波らばより此こやよま
 とめぐまれて後あと說經淨瑠璃せつぎょうじょうるり三莊太夫さんじょうたいふとくはれ得え是又摘要さくあい用もちよて左さふらぐ

掲物東宋郡生玉山坂 天下一說經あやめの正木門

天あま さんせきさんせき 太お丈じょう

草紙くさがみの形かたち
画風がふうもも
ややくくまま
かかくくそそ

与よ七しち角かく
代だい名めいをを
傳つたて廻まわく

羅波らば
九くう

たのいすくらうりやねくらうりくふとやううそぞたんごの
 ひうちやきくぢぞう乃はりんじとあくくとくくそ
 ひうちやふくれもううびはうんぐんみてむうます人

用捨箱ようしりばこ下三



可惜卷尾ふ西洞院通り長者町との記きして年号及板元の名號めいごう闕くわ

山中

二

又友人豊井介子同説經淨瑠璃せらぎを得たり是年号えをさまの
名城のきし不載此せんあやうさまの草紙と合せて寛永中大坂ふす七郎といふ者
ありてあやく説經の印本もあらず事を知れり此二種に二冊ふ續て段と分む前の二
本ふくらがかる久の草紙の大形おおがたなり梅うめよ。やまとこ店みどりさまの画ゑ全く同筆
とあやしからやひ異ことうせん比丘尼ひく尼の画人ゑいじんまべまべ友人伊勢の津つふ住すむる春明の本ふ寛永十二年まことに
とある

セリマラカクシヤ上

コトハ
あらゆまとぞひそひそひそりくらは圓と
門にはあらゆのくにせんくらへみそくへたう
のゆゑとれよによなよくらもくらもくらもくら
とそそそそれぞくらもくらもくらもくらもくら
とそひそりやよやりとくらくらくらくらくらくら



前の二莊吉の初年丹後の國。鏡焼地藏の事哉。後のかるくやや信濃の國親子地義の事をりふ。説經の微意を存へるふ似たり。借。や。ま。からうやの二本板元喜右衆のとゆる。江戸通油町鶴屋の祖。淨瑠璃屋の号寛永八年よりを見れば是より前板元數十種の周本也。事必せり。よまとば初て刊行せり。元和年間よりも知るべく。かく。摸。一。冊。子。二。種。す。且。本。と。る。一个物の廉悪。丹緑青を筆す。彩色。多く點。と。最古雅。七色賣の象。小栗判官も必當時の周本也。べれど未見。

三 奥淨瑠璃

江戸馬喰町の繪草紙屋。永壽堂。西村屋。小。阿弥陀の胸割。きりか。曾我。金。熊谷。の類の古淨瑠璃六七種。元禄宝。永の頃再雕。一。摺板。傳。あり。近く文化中まで春。毎。小製本。と。奥州。の。そ。せ。り。故。ふ。永。壽。堂。東。仙。墓。

用捨箱 下五

淨瑠璃と。又正本。奥州。今。是等の淨瑠璃をかくる者。ひり。二線。あく扇。と。拍子。を。する。と。彼地。へ。賣。く。と。此故。す。櫻。系。拂。諸。の。匂。ふ。見。る。奥。淨。瑠。璃。と。り。是。す。

〔椎柄〕寛文年間撰

陸奥

奥淨瑠璃。緒絶の。橋。や。古。扇。調。和。

〔軒端の獨活〕

延宝八年刻 松意撰

琴。琵。律。蹤。小。扇。城。調。ぶ。昨今非。

〔奥淨瑠璃頻迹の。あり。あり。あり。〕 全

〔其袋〕

元禄三年刻 嵐雪撰

そちのく乃。二弦。さげ。扇。鋤。立。能。柄。の。二。線。ろ。き。と。緒。絶。と。り。ゆ。そ。吹。せ。古。扇。そ。古。風。そ。存。し。る。紙。り。ひ。

あるべ一軒端の獨活。扇の調べみつけ其袋。淨瑠璃とひそむすそれと呼
まる利口そり。かれが彼地の淨瑠璃の廿日より二線へるべからず。一
再云此摺板傍り一阿珍院の胸割の東海道名所記ある見え赤鳥の巻
ある六字南庵右義の作るよりを記されり其是源へ少時あり。文の古雅
ある標題の異やうする事て寛永前の淨瑠璃事明るれども永壽寺堂の
本小奥書みけれど誰人がかくて江戸の摺板の残す考へ得ざりしが不意
天滿八右衛門の名ある本を得て彼摺板の傍り由縁を知り

又云此天滿八右衛門説經淨瑠璃の右まよ芝居の堺町ふたり江戸名所記
の画大菩薩摩が芝居並び野良玉座説。貞享元年印本。載る堺町の圖。出來
と中村善五郎が二軒の芝居ふたきまれて北側。元禄曾我物語。十五年刻。五十文字
天滿八右衛門破り。天満八太夫がかるく道心。あと並べり。とてとぞ方活の

用捨箱 下六

湧より宝永中まであるわれ一するべ

風俗陀羅尼 宝暦十年刻 尺龍撰

冠

浮世のまよふ天満

ふ一 甲州長次・三組

彼がかくし淨瑠璃筋。宝暦の頃。廢て僅ふ残る。事此冠。てかく。ノ若
此天満節の奥州より近くまを傳す。やく。あらゆる。天満八右衛門の事。らしく。紙本
不見されども。さへ。紙本を

四 蚊帳ふ杏袋と掛

誰袖の象ぶり。如く。上り。杏袋の類。かこもれて。白袋を蚊帳ふ掛し。更に
り。大満八右衛門の事。らしく。紙本

鹿驚集

明暦三年印本

前句

人知る。匂。匂。袋。欲。夏。の。風。

信親千句

明暦元年刻

撰者

春清

懷子

万治三年刻

床近と因ふ掛物を心みて

匂袋と駄屋のまゝぐ
撰者 重頼是等の匂を止
めらるべと止

是の高貴人の臥ぬまうけゆべれど今もさる事あるとテガ御うざるふぞりん
又あひふ赤鳥の巻 ふ大嶋求馬の説るをさて「廿日を遊女山たゞきを浮世
狂ひとひしより傾城の宅前あは柳を二本植て横木をせい布簾をうけそれ
ふ遊女の名と書いて下ふニ角ある袋を自分の細工みて付一より足を浮世
袋とのひももくろがり」といふ事を載られて是匂袋なるべ。夙ふねうちで
自然香を散さん料されが牧帳へ掛るも同事のやうふかもる。昔に古文と
云ふ遊女更衣格子などしてそれふ次第も伽羅を衣ふ留まるがあつ

まよふかる餘情もすゝるあやぢり。それが彼誰袖の如く後身香類
をれど布簾の纏留とあやしくるべ

〔五〕枕簾笥

何の器物もれ其形のと専むるあれ且夕目み剥れ古くよりの物の
やうふ思ふ世の常より塚枕へと近き製作するべれど若き人の名づぶ
も知るど唯枕と云ふ物と思ふもゆり。西川祐信の画正徳離形の枕

の模様ふ形の似よるべれど今のがく縁と云ふ物をつけたゞれ此枕を
あひ中人以下ハ皆首箱枕をしむべ。客のまうけるふとて枕五つ家を重箱箱ふ
られ方あり。見えを枕簾笥とひ。古き調度を商ふ舗主とふあれたり。小口を
黒漆を塗紋折を金粉を此時繪あるふどれば下賤の者のと相枕を用ひし
ゆうふと今も旅館屋茶屋やうのところあひ此枕簾笥のあひ缺不知

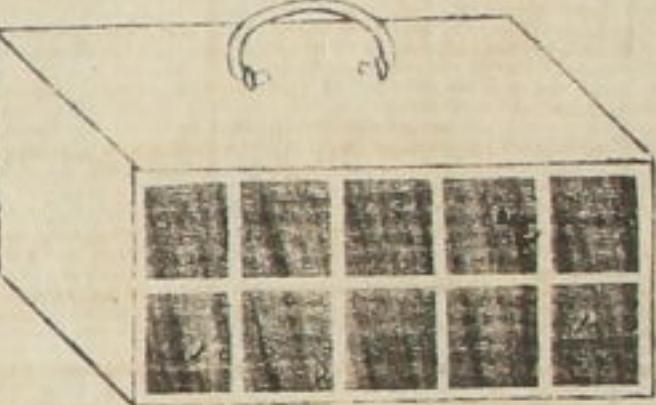
元禄六年印本
京大坂茶屋雀

一名

諸分調方記

ふ載る圖

梱



此茶屋雀のやうある十の梱とゑがきする草紙
を不ぞ今藝州官鷹の遊女梱二つと箱ふられ
錆そひきさぐるやうふあら城りて東比形ふ
似うりと。

塵取

延宝七年刻 常矩撰

大形の恨みの教も十年で
東收候重ねてうき 梱 箱 風 病

常陸帶 元禄四年刻 児水撰

春雨ふ九ツあらむ 梱 ふな 林鷦

謡 うる人もうくかのれ一く床 ふな

陸奥千鳥 元禄十年 桃隣撰

木梱や十人までも あ 箱 琴 風

用捨箱下八

四五百森 元禄七年刻

櫛子こ無や 隨分の用 摺者 因
勝月十の梱ハ十兩ふ全

而形集 平砂匁集

本梱を八卦よ配れ复座發

かる匁ごものとされば昔の此梱簾笥りづれの家やむにきく物ある也。又

江戸筏 享保元年刻

前匁略 十人前モ梱りや一き 青誠

とり吟誦るを思ふ共享保の頃ひとぞ塚梱をあされ箱梱ハ廢すかとあらん
又曰 河念佛 元禄十四年刻 ふ「梱どんを次モセる伊勢骨柳ふ何うちられ」とあるの族の
用意ゆて梱近くあく簾笥の事より。毎近くを残す簾笥ととりふ同

六 夢想枕 夢想流ノ髪

夢想枕又入子枕モリ。是ハ五ツ或ハ七ツ入子ゆる箱枕モリ。今もゆうべれど江戸あそかとぞれぞ總物ふ妄想とタチつゝハ神佛の告ろんじゆう接モ不思議との程の事や物の形の変むるをいふ。一かと思ヘバ二ツやもニツキもヨリ思淺み枕との義モリ。裏うと思ヘ表あも度を妄想羽織。板モ張つらうとアリガ空虚より狂想想空。引出一のあきこへも接ひきこへもゆうるが妄想引出。此類多くあるべ。或書ふ夢さう簾笥モ夢窓國師の持物ハ調度とうへるるりと記一うちへ信ト難一。妄想枕ハ相撲の圓るんどて昔ハ專つちうる東海道名所記万小田原足踏。けやきの丸木履モ。妄想枕右宿の右の方ふ外良ゆり」といふ事えり。

坂東太郎

延宝七年刻

近年又同名の俳書あり

用捨箱下九

妄想枕神ゆゑを神 郭公 黄吻

伊勢宮苟

延宝八年刻

星祭り七ツ入子ふ偽よけり 撰者 心友
小町ヶ庵の客枕乃 痘曲言

餘花千句

宝永二年

淳田殿より くひひゆり 狀
交ての枕をぬくも 七ツ組

又かる草紙の標題小入子枕

正徳二年と云ふも同あひむきある話を五ツ組合せ
するの意す。妄想筆。妄想行燈など物の本ふやえられどめにしかば略つ
天和笑委集

三年

の記ふ上野へ花見ふ坐ら女の事をいふ條ふ「その品とあるどぞ染
ふをそ五寸の大振袖ゆき短くつま高く当世やうの三色をふあきて二ツ四ツ

重ねて雪の肌（たまき）
 赤（あか）ひき合せ小づまぢ揃（そろ）て（さ）あらわすなり。腰（こし）ふくまれる丹前（だんぜん）帶（おび）じろ
 きやくと引（ひき）吉添（よしぞえ）ふ縫（ぬい）がむらり。前（まへ）まもてかく（かく）むまびふあけむ
 やり。此系縮緬（ひきくしゅくみ）を細ゆ。腰（こし）もそれよと引（ひき）あて。是も赤（あか）ひき合せ縫（ぬい）いげ。髪（くみ）
 かうがれ鶴田（つるた）りげ。所（ところ）の女中の着（き）想流（おもながれ）。ち取（とり）かうがれ詩繪櫛（しひくし）。びんはを
 丸錦（まるにしき）。けよくかぢり。加賀（かが）のせきを立（たて）てらひ立（たて）。とくとくまき毛（まきけ）の組（ぐみ）。自（じ）き
 うひざ（うひざ）袋足踏（ふくろあしざか）。紫竹（しょくしょく）のざうをなう縫（ぬい）のせきど。これかくらべとさへも
 風流（ふうりう）ふか立（たて）といふ事（こと）なり。此文（このこと）百五十余年（ひゃくごじゅういちじねん）前の女（めの）风俗（ふしき）を今眼前（まなま）か
 如（ごとく）。桜（さくら）ふ着（き）怒流（むさうりゅう）といさげ下地（しもじ）あらべ一序（じょ）をづ一の如く見（み）る髪（くみ）の笄（くい）を
 拔（ぬく）下髪（さかづき）とする。是も形（かたち）の変（かわ）る故（ゆゑ）如（ごとく）名づけ一ふやあらん

七 瀧井山三郎

用捨箱 下十

垣下徒然草

寛文十一年刊行



滴音踊拍子、井愛屢聞飲

山可（か）下（さか）高（たか）号、三十雲兒君

絶（絶）を（を）ある兩（りょう）

うもひのかうく

浦のるき

袖のぬれ

游井山と節

めんてふさみよふ所（ところ）をとも婆（ばあ）いん
 あらうあれども何（なん）とやらんとあきやまゆ
 なはでけでけくあんきくまほほあきせきの
 へんけいかのむものあらんや度（たど）あらん
 水（みず）あるうとぞあらすり

こうまひとりづめやとよせせざり

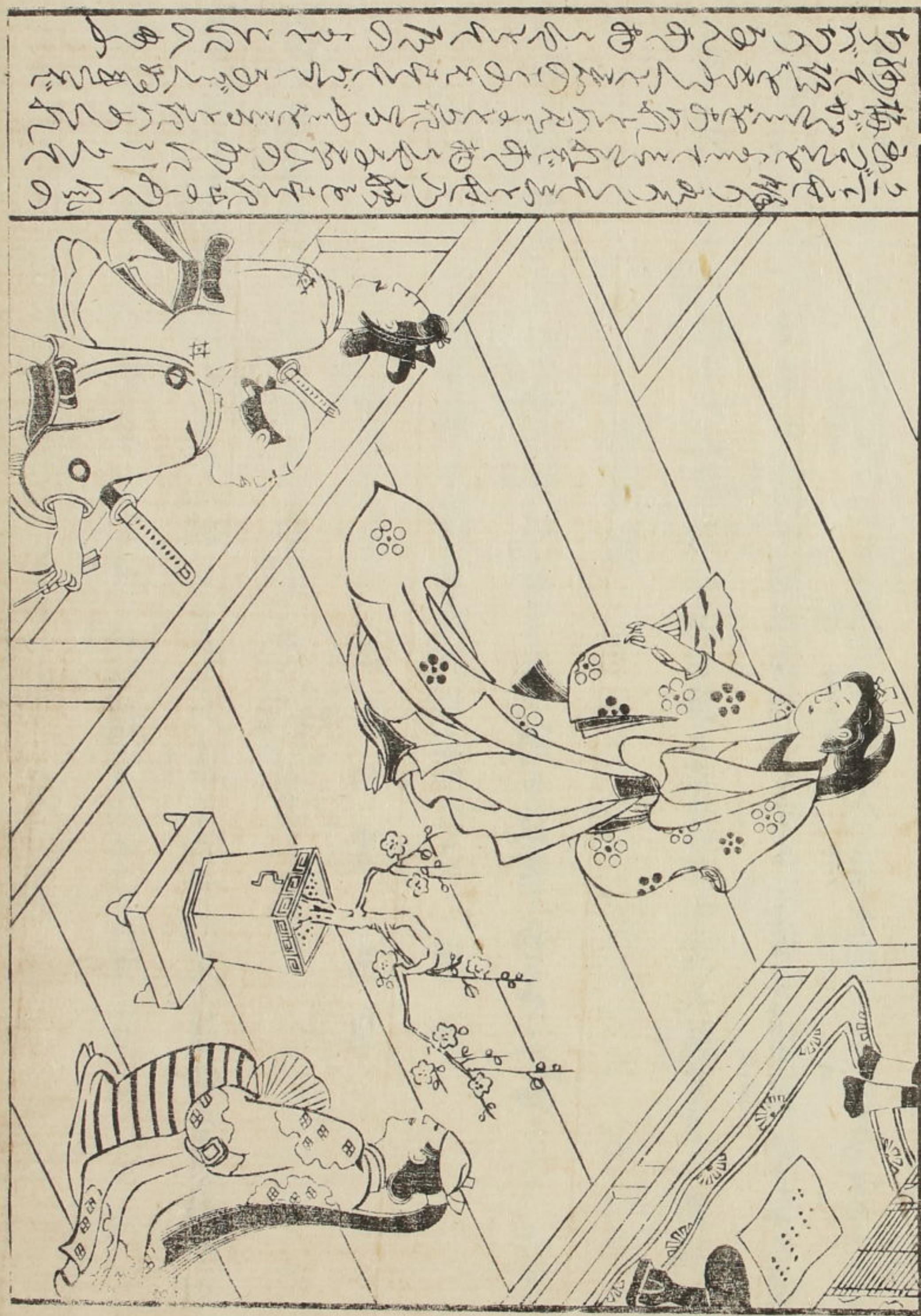
○柳亭曰肖像の詩のと題して評の内へす多小載
方をひとつふ記する

麻井山三郎ハ此垣下れく草小見奈如く寛文中人ふ愛られかゞき舞の
上りそぞ梅がつまとい狂言ふ名あり江戸の流行物を集め一短歌ふ略浪人猿を
退治して八人座頭の見世物。仁王く助が大力見ふる人ハ布引の游井
山ニガ女ど。あをあくへ盛とすり中略代くも豊かとされば。うらんぶくと樂し
り一は經おひキカ著還魂紙料又花村幸助が傳一本草年写本「是ぞ浮世
ノケンボンの草引よ未寺」の中村が。サ之居ふ並居る鞆原ハ清き流れのあらそる。游井山ニガ舞のをふ部羅
湯苑とあそばれるじの事なり。梅まよふ西鶴一代男五の巻京師靈山の事
をひく條小游井山ニ寄の名なり是寛文元年の頃の事を記す。又寛文

二年刻江戸かぶき少年の評書剝野老ふ山ニ寄と不載。されば當時初
ハ京へのやうするべ。万治年間の印本京のかぶきの評書野良虫山ニ寄
アラモト義高ひく如く江戸より上りて京の産みあるべうど。借。此山ニ寄
ハ京へのやうするべ。万治年間の印本京のかぶきの評書野良虫山ニ寄

用書箱下士

若一と延宝の初ふ没一と古今役者物語延宝六年印本「流れも清き玉川の
せんのあとうど主膳と野良虫の水上そり。さて又游井のあれとあ
消てあらあき山ニ郎云と記」。彼游井が名をとす。梅がつまの狂言の
画師次ふ又三茶三幅一對延宝九年印本「江戸ノ町ニ目大黒屋内初鷹」と遊女
を評すと「面附うされどかりてあやとみふ中略さる人の曰。游井ふと筋ふ
独孤ると。またとて立てるぞ。あら。游井はやくみぬうりけるふは君も
すゑみぐ全盛あら」又西鶴大鑑貞享小江戸の事をひく條「野良の花代
姿模本形て一冊とせと居るがう美形と觀ぶ事重寶ふるがくらむ中略と
もや憲風の波根の扇よりあら游井山ニ寄中略恨りの浮世のうらみ
さるる花の村雨桂光の雲霧十九の名張り平生の顔色の病中ふ衰へ著
解眠る如」。きどあれが没して後もも慕ふりのあやかすとあるべ



役者物語
載る圖
加賀やの
多喜川宿
と。梅が
は油もろ
別事へ
ある
山に身現在
役者著
物語
役者子
り

虚栗

天和三年

其角撰

小袖 組せて 併白へ 梅ヶつま 其角

是山ニ席スカシタが追善の匂アヒメあらすぢ也。此集より十八年後芭蕉翁十回忌の刻同其角カクが發起ある三上吟

元禄十五年

忌の刻同其角カクが發起ある

三上吟

元禄十五年

向て 美み 盛物の裏 其角

とく附合付合する不照合不照合て如シテ思ムるより別シトの故事物語りや不知

八 人座頭

前フ錄ルしる短歌ハタケふ八人座頭ハチジンザトウの見世物ミセモノとハ今ハ八人藝ハチジンエる。西鶴作ハシロ一代女ミツガタ貞享モリヨウ二年ニイニ万治年中マニジ駿河國スリガタノ駿河のやうふ酒樂サケラとく座頭江戸エドふをう

屋敷ヤシキ方カタのゆきよみ紙帳シナガタのうちふ入スルて呑物カクモノ八人の役ヤクを獨ソロ一ヒて間マダをあすみると

用捨箱下十三

久事クシタをえうり八人座頭ハチジンザトウとく彼酒樂サケラが事モノをべ。此業中絕ゼリをうりや。其後名メイれる者メイジをキ。近く天明アキ末エンドの頃ハタハタ川流カワフ歌命カタシメ其才子歌遊カタシメ寛政カントウからカタシメて師シシテ小浦コスミとシテ流行ヒトツ文化ブリタニの初ハタハタ欲シテ彼輩カタシメうち集シテひ此業ハタハタの祖シシテりそ長瀬シシテ聖理セイリとシテの者シテの百年ハタハタ忌シテを吊シテひシテ事モノを。されば聖理セイリハ宝永ハタハタの頃ハタハタと盛シテんシテ經シテる者シテうべれど考シテへ合シテとシテ草紙シナガタを末シテ見漢土シナガタあも是シテは修シテる更五雜組シテふらうと先達シテの隨筆シテふアスシテう

九 錢獨樂流行

元禄ハタハタのすゑ宝永ハタハタのちトめの頃ハタハタ何人シテ欽錢シテ獨樂シテをシテ。一時ハタハタ流行ヒトツせシテ事モノらを俳諧シテの占シテ者シテ路鷺水ロスカ京都シテ住シテ新玉櫛シテ年印本シテ二の卷シテ「香山梅シテ助シテとシテ人シテ常シテ獨樂シテを観シテびシテたシテとシテせりシテる時文シテの錢シテ六錢シテ七錢シテ乃至十錢シテと數シテ無シテきシテ不シテ小筆シテの軸シテをりシテてシテ別シト心本シテを

通と一糸を卷まわて回轉の機きをもつけひまくは日足残愛あー比淺獨系せんのよあ
ふ記きを書くて曰い。獨樂こまよあまよ汝時うを得え一ひとろ楊弓やうの槍ぢふ催促さまそく
せらを行成の紙袍しほをもて射のとの座すふ連つりしまく珍めずらめずき事ことふ
のひかか不今ふ今いまハ復錦ふくきん金襴きんらんの衣服いふくをうびやうぶ。又紅紫こうしの綿めん糸いとを
帶おびとと猩きょう々紺ごん羅ら紗紗の蒲團ふとんよ象牙ぞうが玳瑁だいめいの杖じょうをつき一曲いつくの舞まいふ錦きんハ
被ひを翻ひるせば滿座まんざ頤い解けてよろこび。洛ら中の男女貴賤きせんを厭いやを汝汝が舞振まいふ
の久ひからん事を願ねらひ汝汝が藝うの他ほかの勝かつん事を思おもて妓ぎ女めのを仕立あわる
如ご一五節ごせつの舞霓裳衣まいしようの曲きょく。永代橋ながたばし。何なんれの曲きょくふ長ながトと底物そこもの
賞まうび義ぎせらをそ時代じだい昔むか繪ゑの相あいの中なかふ豈かふ眠ねり。青せい銅どう鳥目ちめいの細名ほそなを
削くずて助すく六ろくといひ。文七ぶんしちと名な無な柏勝はくと呼よき。松風まつふと号くわす。萬まんかくををへ高たか
位ゐ不滿ふまんする料足りょうそくといひ渉よーと名づけなづけハ様きさき名なされど今いま汝汝が花はなやう

用捨箱下十四

ある威勢せいあハ誰だれと俗性ぞくせいをうふ者しく云い。以上じょうじょう擷用せつようと記きしてす名なふ
又六ろくや躋くわの緒おきうと花はな二にす」と云い句く載のる。又諸分床軍談よしわん年号ねんごうラケ
五の巻大坂新町の事ことをひ葉は「勘かん七しちの名な鼓の紙入しきりうと錢せんをうべ
金入きんりの煙草入えんとう入いきとよちて早東錢せうとうせんを車くるまをとと奥座おくざへねてまわまわ
て入れをまのき。此車このくるまを京で錢せんをま江戸えどで錢せん車くるまとゆふらまらま此新しん八は大坂おおさかと
今いまがも下くだりてぢや女郎めらうをまう方ほうふかう鍼しのをかけく。う廻まわてか目めかめや。
此舞まわうちふこ味線みせんをうまま。ここ遍引へんひん方ほう。淨瑠璃じゆるりをう道行みち一ひとかかる。あ
ののああを酒席しゅせきととおおとと奥おくととせせまま。備玉樽びぎん等とう不記ふき。獨
樂どくらくの名なと考か考かふ文ふみ七しち。文六ぶんろくい吹ふきええ。如ごく。文線ふみの數すうり。助すけ六ろくも一ひと中なか節せつの
淨瑠璃じゆるり蟬せんの聲こゑががふ万屋助まんやすけ六ろくあり是これより。柏崎はく。松風まつふ。誰だくも知しる

謡曲

あり。其曲残

うる間。彼助六の道行を語る程。

舞やまざり一賞

かく石づけ一あやめらん。とかき。永代橋の長トとゆるもがきの譯ハ既ふ床

えだ

軍談ふれり。永代橋の松の葉

元禄十

六年刻

この巻

小載

トトメふ。願ひもへとむかけ

海くもとありて。永代橋みぞゑゑみとくふざる端歌の名もあり。是又それを

くそ程みぐ舞を譽言て長トとんりひよるより。再接ぢろふ近く

若緑勢

石づけ一あやめらん。とかき。永代橋の長トとゆるもがきの譯ハ既ふ床

えだ

軍談ふれり。永代橋の松の葉

元禄十

六年刻

この巻

小載

トトメふ。願ひもへとむかけ

海くもとありて。永代橋みぞゑゑみとくふざる端歌の名もあり。是又それを

くそ程みぐ舞を譽言て長トとんりひよるより。再接ぢろふ近く

若緑勢

曾我

享保三

年正月ト二代目市川固十郎

外賣賣の詞

トマグ一粒り一物づく

中

時隨筆

天和三

年著

近き頃京洛浪速の老少楊弓と翫び云々一錢ヲ

竈鬼二、地三、山五、於湖賀十、牛をせ、草冠百、牛とを

とく吏見

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

海くもとありて。永代橋みぞゑゑみとくふざる端歌の名もあり。是又それを

くそ程みぐ舞を譽言て長トとんりひよるより。再接ぢろふ近く

若緑勢

曾我

享保三

年正月ト二代目市川固十郎

外賣賣の詞

トマグ一粒り一物づく

中

時隨筆

天和三

年著

近き頃京洛浪速の老少楊弓と翫び云々一錢ヲ

竈鬼二、地三、山五、於湖賀十、牛をせ、草冠百、牛とを

とく吏見

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

トモ

十 俳諧の句と狂歌と誤る

亡友曳尾庵。文緑慶長頃の古画うちと色紙形のうちと花鳥人物

の類をゑりき。ト小宗鑑が犬筑波集の附合の句をちりし書ふあく霞

せり。是ハ屏風障子えどふ押おさハ料小當時あこゑす。大筑波の句を

おて遊覧し物えど。備そなへに虫ふゑるを心ふ者り狂歌あやし

思ひ違へ写もく口ゆりいづへとあやしき事例を雄長老

新撰狂歌集

元和年下大般若をくと女のかくうかくたきやうくさんどさんひもくとゆる

間撰

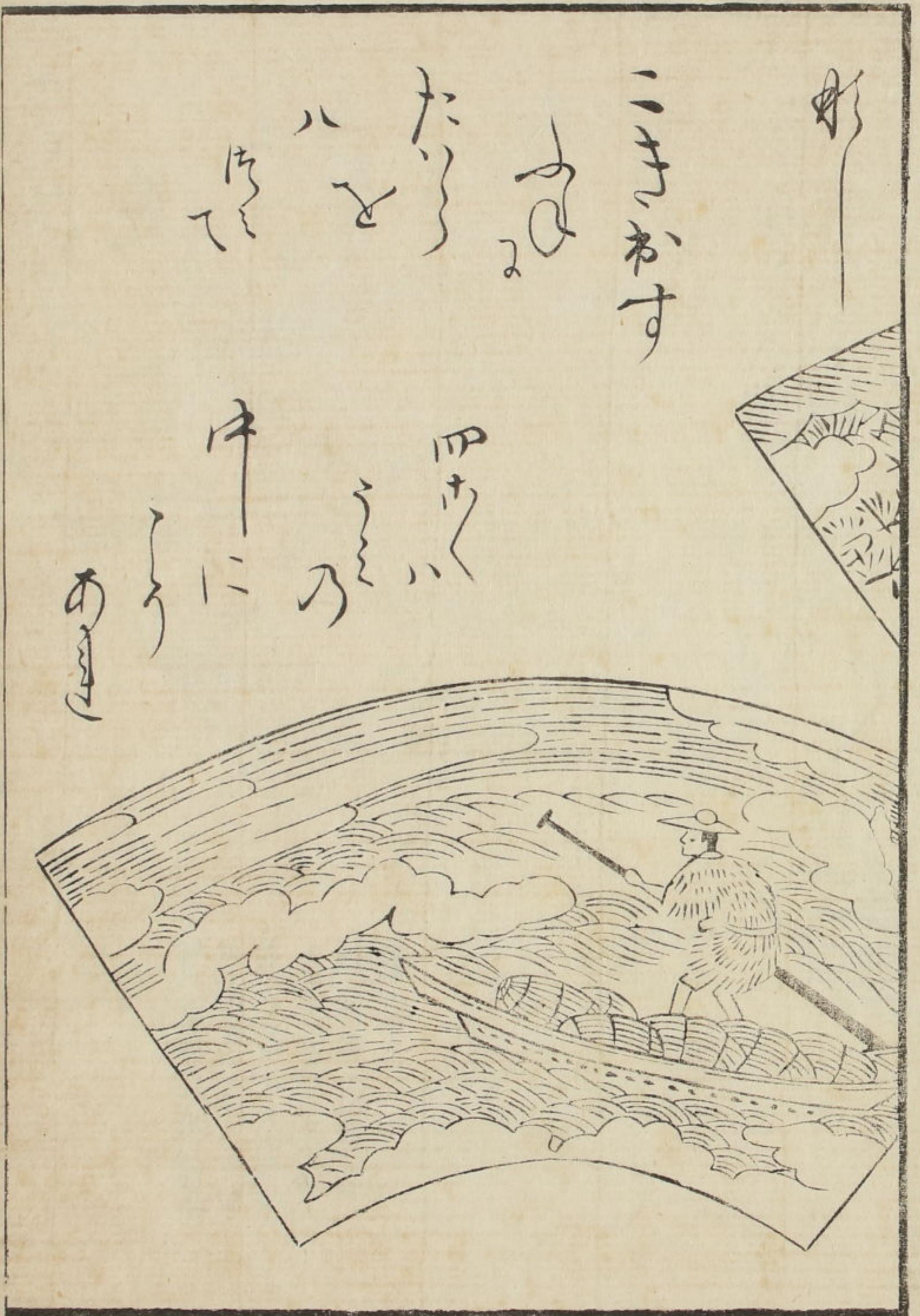
狂歌の句を彼大筑波の附合をり。又扇の草紙

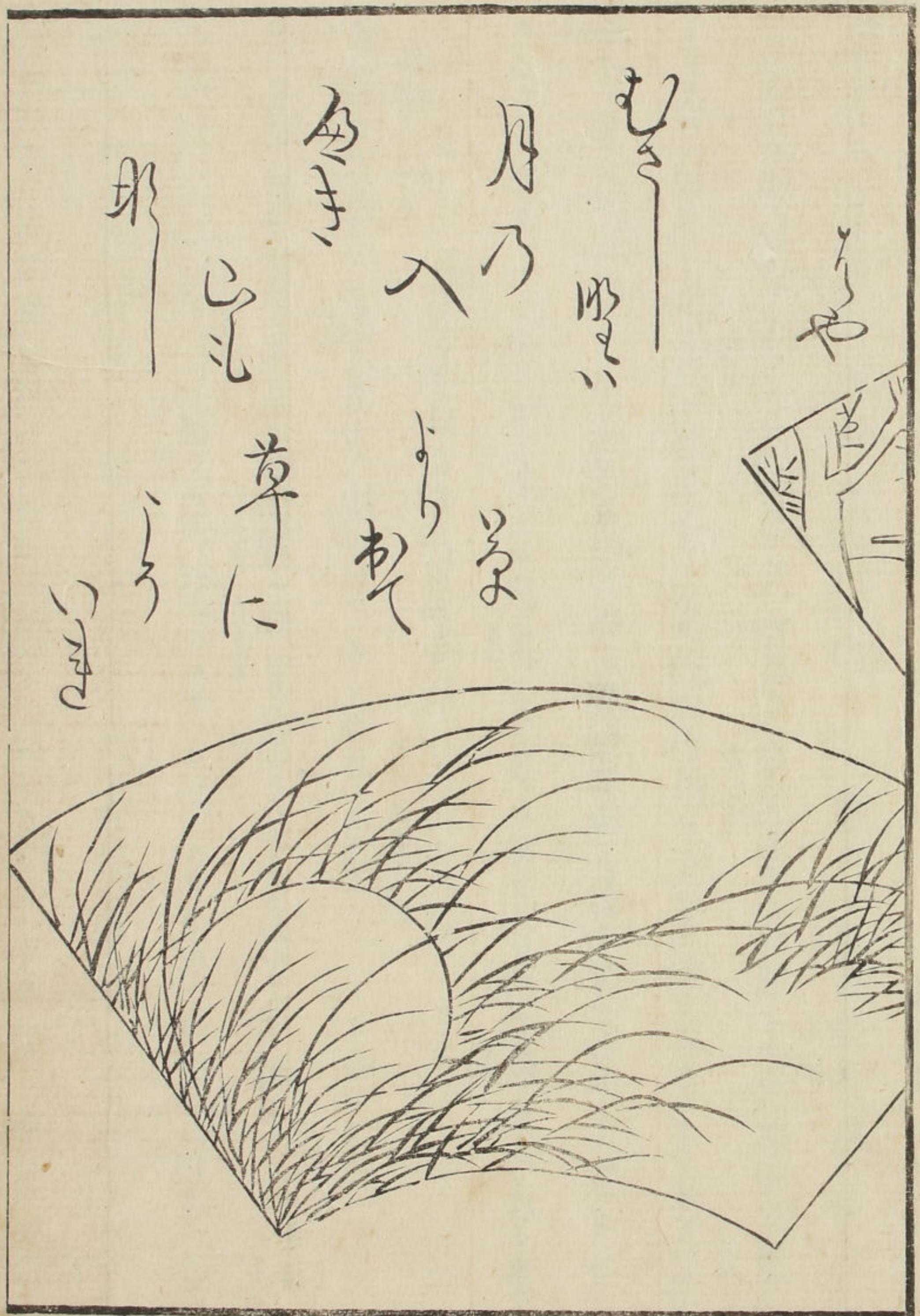
とくねり残闕を曰くて

刊行の年号ハ知らざれど。五色の紙へ摺角の巻本一名光悦本と云ふる

物を狂歌集と同頃の書をり。次ふ模を如く扇の形を画ひ。上ふ誰くも

加る古歌ふ交て狂歌を題む。是ゆも大筑波の句なり





。寛永後の佛譜
此詞をどういふ句
多く不思議考証
ふ用ふされが悉略
佛譜古道具ふ
載べ

前の。こぎ出を船。月かくす花の小枝の。二種。彼大筑波集の附合の匂。り。
のち あやるきさき
後の。大長刀。武藏野の二歌ハ大筑波より見えざれど前の例ふみくへり是又古き
とき
佛諦の附合。うべ。大長刀かざぶとひをとひみがみゆくも。強敵。山賊。うんとの

古
菟
玖
波
集

りをす。紫の細脛と狂言ふ附するやうふ
散花を追かけそやくわくわくする

天長刀よりノ
とある此花あそちうすとらふげ集より前ふりて。それを取る匂き事
必せりされば狂歌よせよ予考への如く俳諧の附合よせよ大長刀の方も古く
より人口ふゆうす。武昌野の方に古き物の本や見えざる歟。是も草より出て草
をそれがふゆく。虫歎細流などと附づきと案外する月を出して狭き匂を廣く
とすよしむべ。俳諧抄 奥書行生 七十五宗鑑 小前 中ふ小鳥の声すひりをもつ

卷之三

七
四

卷之三

一
四

七

卷之三

ノ
セ
ノ

附「おまへどぞ備前國の物語」と云ひて宗鑑の自注ふ「けの字のなと
ヤス人云れども此類くさかるまゝ」と見え云れば昔の俳諧の前句附句と同字
あるをもさまでゆの嫌ざりしるべ。武藝野の歌ふ月の入ぎ草ふとそられ。且どう
同字なり。附合の匂とせば免をばき例茲より歌をひのあべくと。元和三年
徳永種久といふ人の紀行江戸をぐりふ。某あくばまけてよ賣や六合ふは宿
もだて誰か川傍引もと見れど。或藝野の月のりびきふもよ草より出て
草ふとそられと。古き歌ふも詠れりと。いふふ扇のさうと合せられひちやく
慶長の頃古歌うりと思ひりやまじもありべ」

上 下 帶 之 年 國 之 人

今下帶とあ細とりひゝ事考を記して後經平子の春湊浪語のちと云ふ
其説最取細せうわとくまり々れが。かに破捨んと思ひやうすて近ちく。とんふ。と音便おんべんありひゝ事など

俗書ふ見えくろの載られ福ば其かとくを記さべ 經平子 義貞記を引れど
今傳る寛永の印本より「鎧可」着次第の事。一番浴衣二番小袖とあり其
後の刻本も如く記しての綱と云々是の昔書写し、昔一番の綱と云々^ト
解せざり故私ふ浴衣と改めりあるべ 鴉鷺合戦 兼良公序作と云ふ鎧着
用の順を記し、ひいて一番の綱と云々二番以下 義貞記 ふ違ふ事あけど
古き義貞記の綱と云々事必せり。此やう春深浪語ふえふる書へ略つ

守武千句 天文九年

町へりげらむりめく見ゆ
よ綱をばかと袴へ下ころびて

△も下帶をあひるどかくとく 古今著述集ふえう 又 醒睡笑廣本 元和五の巻ふ

宗長法師のむかふすまう 晓らそぎかふとて下帶を

酒捨箱下十九

かうれ一城ねせかくうれべ縫てつたす

思ひきやおととしうかの濱風ふ浪うるる紀名のたんとぞ

同書六の巻の輕口話やも又の綱の事ひり宗長の歌と云ひがだづみされど元和中

まで此名のゆゑに証と云べ又近く 正章千句

正章の貞室初名也

相撲そりぐわれく 中

かへさくかここのたんみあけて

正保四年の吟うり是より二年とて寛文の半一雪との者 茶拍竹 と題す

草紙をせ者一正章を批判しひとて前の相撲ふ附ぎと難を負 捶打 と

久書を作て是ふ答へんみとて下帶の事よりそれを附めとひのう。とひのうて

思ふ正保の頃までハ音便みてんるとひの寛文の頃ハその名も人知らざる

なりべ。因ふ云 見聞集 慶長一の巻下帶古ふかる事の條ふ やくの昔ゑ老

あき頃までへたの帶ハ麻布杯を四五尺程おきり中うち二つ分割。げよる
方と腰へ廻一筋みて結びしが當世の下帶へかまうより中略今ハ世上豊
毛皆人形をもて杯の和子は物を腰へ引廻一斤結びふゑせり」とりふ
事例ノあき頃と天正の半をきてとりぞれしる。かれが今ハ下帶の製法
慶長中を始るべき

〔十二〕別當と/or俗語

神宮寺の類を總別當と稱する。誰とも知る如く神と守傳との義あり
そぞよて轉て俗語の別當の我をふらうひ。引いぬ小物を喰ふをり童の
菅神さんど小果子やうの物を備へ。それ取あつて喰とか別當とする
是す。夏の夕々飛来る青色の虫を夕顔別當と/orも夕顔の花をもとす
いり然の顔小あるち故の名す。北越を蝶をさうづくと/or所ある

用捨箱下二

近年發販して世ふをとあるとく

〔雪譜〕

小見えうち接する伊丹發句合

享保九年刻

才磨翁翁の判の詞ふ。蕎麥の花ハ蜂の酒。と/or譲り是ふ對見れ。蝶ケアヒ
チヒ花の蜜を吸さまの酒をのむ似る故酒別當と名づけり。やうふわす
れる。又蝗を寶盛といふも原ハ稻別當といひを坂東の農民長井別當
の名もきたり。戯れハ寶盛と俗語のやうふりひふるが遂ふ諸国へこどり
みへんくどや。古の遊女の別當今もり廻の別當も此俗語ふ近一守傳く
の義ゆてはえ難き族。昔の馬屋の別當

〔十三〕太郎次郎

悲情の物の魁を太郎とよび。それふ次を次郎と/or事種と/or刀ふ太郎
太刀次郎。刀。盃ふ。太郎貝次郎。螺旋。利根川を坂東太郎と名づけり。も
園東の大河をれり。嵐雪が紀行

〔そのをあゆ〕

宝永二年 小曾根太郎とのおり曾根

次郎をくぐると、のうへ伊勢より紀州へ八鬼山越の坂の名とゆせ。南都の大佛の鐘を奈良次郎といひ是より大きい海を郎といふ鐘は遠江國の海の底ふ沈てゆりと信と難き説みがく彼地の人の常談す。雲の峯と。江戸を坂東太郎。京や丹波を郎曾根次郎。九州を比古を郎なども其地の山川の大きさを雲の名ふかせし。心情の物を人名の如くいひあそむ原來一時の戯をあてさまふ古きよどきのやうやもかうされ稀に鳥憲学生の著口遊ふ「山ち。近二。宇二。謂之大橋注今案る。山ちハ山崎橋。近二ハ勢多橋。宇二ハ宇治橋」と。山ちハ山崎を郎の略。近江二郎宇治二郎といふ。唯。二三とかなるのみ。山一。とこそいふべられ。山ちとあるを二三とも郎の字の略ぢゆ事明る。此書天禄元年の作今より八百七十余年前大橋をち郎次郎とより事なぞく。此口遊の注ハ弘長二年ふ書一ウもアレど山ちと云事ハ如本文より拾芥抄ハ全ハ書のちふ書うつまれ。又近く

用捨箱下九一

佛諦のゆ少ひ此類の洞窟私小製一とひびきゆり

隱義

延宝

雜菴

初雪の花の兄きや富士を郎

伊安

能枕

延宝

雲や疊空小知られ寒富士を郎

良景

田鳥集

元禄十三年印刻
三千風撰

余所の雪枕んであら富士を郎

能榮

前句附歌

元禄十三年刻

涼船その雪をよ富士を郎

作者不知
其角高点

茶の例不より。渡河を郎さんどくふべき。彼佛諦洞小製一故。すとくま

たれふうちひもと富士を郎とりひきゆり

廣澤やひこうあぐき 沼ち郎 央邦

山のち郎ハ富士なり。川のち郎ハ利根なり。それ等ハ對して。ちの沼のち郎
多モとりひたそ。余所少ハ知るぬ時雨と孤ぬくと廣澤の廣き光景をりひる
あり。池ち郎とりふ盆を沼ち郎と轉てくらハ俳諧のをらきるべ。本朝文鑑
ふ載す支考が酒盛の移文ふ武藏野織沼えど不盆の名と呼ぶ。飯椀のち郎
に肝をけーとあるはあまくふ狂じる書をまうぐ廣沢を沼のち郎とし。椀を
盃のち郎とすも其意ハ齊。是前ふり私制衣する綱をり

此条ハ亡友曳尾庵の説ふ予が考へを添へるなり又或人の説ふ近江國
の方言ふ鷹狩沼ち郎とよそれをと。按る不唇を沼ち郎とよ新
向るべれど京師の匂よ他国の方言をよせりゆゑ能まりをも

用捨箱下卷

此廣澤やのやハ古歌ふも例あらひゆる源のやうで。ふかづやうり俳諧
モソリモ。白炭や焼ぬ昔日の雪の枝といふやうて。白炭ハとくふ事ある。是も
廣沢ハいそりあぐくとなりへり。此や。ふるかよす。廣江ハゆといき
ざれば唇の事あらゆくぞ熟れやぢとひゆべ

〔十四〕天ヶ紅 尼ヶ經粉

夕陽の暉赤雲滅ゆまが簾ふとりふハ天の紅なり。又一種。女僧の尼の字を書べき
なり。是ハ今絶くる童話なりて童謡もうひーやうふかもなる今もうもふ其
童話を作るといひ。昔一人の尼あり他所小隠一丈を持しげゆる時頬簾ふかへつけて
粧ひ。彼隠一丈を侍一乞尼の父母ふ告るりのめり親おぞうにて尼を叱て懲りくと
少程の事るやアあるべ。節用集大全 延宝八 年印本 阿行「尼紅粉」注 俗呼赤色之
雲曰尼紅粉」とゆり尼の字を書へ。彼童話を混じるの誤なり

鷹鳴筑波集 寛永十五年刻 西武撰

親ふあらまき迷惑やまく

尼^{あや}が不^よつけうる鷺^{アシカ}ふとひぬぐひ 日能

崑山集

慶安四

六ノ巻

鼻^{アシカ}花^{アサガホ}あでも紅粉^{ベニバニ}とづけのま柘榴^{カキ}重吉

七ノ巻

尼^{アヤ}が紅つけて稻妻^{ハリマツ}待夜^{メルヨ}道清

道清の匂^{アヒ}天^{アメ}が紅あれども彼頬笛^{アヒ}ふの事ふとぞきゆる故^{コトニシテ}尼^{アヤ}の字を書^シと必せり。慶安の頃までハ此の童話の所ヤ^{アヒ}証^シとまべし。前よりひ^ト如く踊て小歌の安宅^{アキラ}ハ何よりて纏^{アヒ}て^{アヒ}欲^{アヒ}「尼^{アヤ}がべつけてちやかありもうよりひ^ト」大事^{アヒ}うそそそん^{アヒ}よ坊主^{アヒ}大坊主^{アヒ}とゆりば事^{アヒ}をひ^ト古き童謡^{アヒ}事明^{アヒ}るり必生所^{アヒ}べけれど未^{アヒ}考^{アヒ}。以下^{アヒ}の童話^{アヒ}ふかくもざり赤雲^{アヒ}の匂^{アヒ}を

用捨箱下卷

玉海集

明暦

下紅葉空^{アカエ}みうつむや 天^{アメ}が紅粉^{ベニバニ} 朝慶

昔^{アヒ}蘿^{アヒ}あとうを^{アヒ} 今^{アヒ}と今^{アヒ}アヒ

新續大筑波集

万治

紅葉^{アカエ}サ^{アヒ} 尾^{アヒ}よがたけやのまづぶ 重明

紅葉^{アカエ}とも赤雲^{アカスミ}よとる^{アヒ} 次の匂^{アヒ}衣裏^{アヒ} あて赤雲^{アカスミ}を紅葉^{アカエ}ふ見^{アヒ}んとり^{アヒ}

眉枝集

延宝二年刻

阿波國與行 紅葉^{アカエ}ともなん里^{アキラ}の海士^{アシカ}天^{アメ}が 紅^{アヒ}維^{アヒ}舟^{アヒ}

隱^{アヒ}菴^{アヒ}集

延宝五

阿ま^{アヒ}ダ^{アヒ}紅粉^{ベニバニ}の末^{アヒ}つむ花^{アサガホ}めたみを^{アヒ} 似^{アヒ}船^{アヒ}

如^{アヒ}天^{アメ}の^{アヒ}い^{アヒ}圓^{アヒ}字^{アヒ}よ書^シて昔^{アヒ}の赤雲^{アカスミ}ふ尼^{アヤ}の字^{アヒ}を^{アヒ}くもと^{アヒ}多^{アヒ}混^{アヒ}ト誤^{アヒ}マ^{アヒ}

延宝の末^{アヒ}と^{アヒ}一

餌譜住吉物語

青流撰

元禄年間刻

山ふくニ尼ヶ紅さす 新田雲 重仲

昔の例より。此匂天の字をかくべし。是のとあるす近くに御て尼の字が
つれど。又京橋中橋あまんう薦ふとひよハ江戸中橋小お満縄荷とて紅粉を備
願ごらむる社今小在。享保の頃奇特の事なりて、余諸群集あらる刻の童謡
ありとぞ是も又天の紅小混ト赤雲を見やりと拍てうふ童今もむ

十五 溫鈍の看版 芹川

昔ハ溫鈍かとあるれて。溫鈍のかとくふ蕎麥きりを賣。今ハ蕎麥きりを盛
みそて其傍小溫鈍を賣。げんえん屋とひよハ寛文中よりあれども蕎麥屋とひよ
近く享保の頃またも矣。悉温鈍屋とて看板小額からハ櫛形ある板へ細く
そりする紙を掛け方を出しつか今江戸小は絶。寛政の初までハ干温鈍の看
板ふ彼櫛形の板ふ青色紙みて縁みど成さうるを。軒へ掛くとまくあく

開船箱下九四

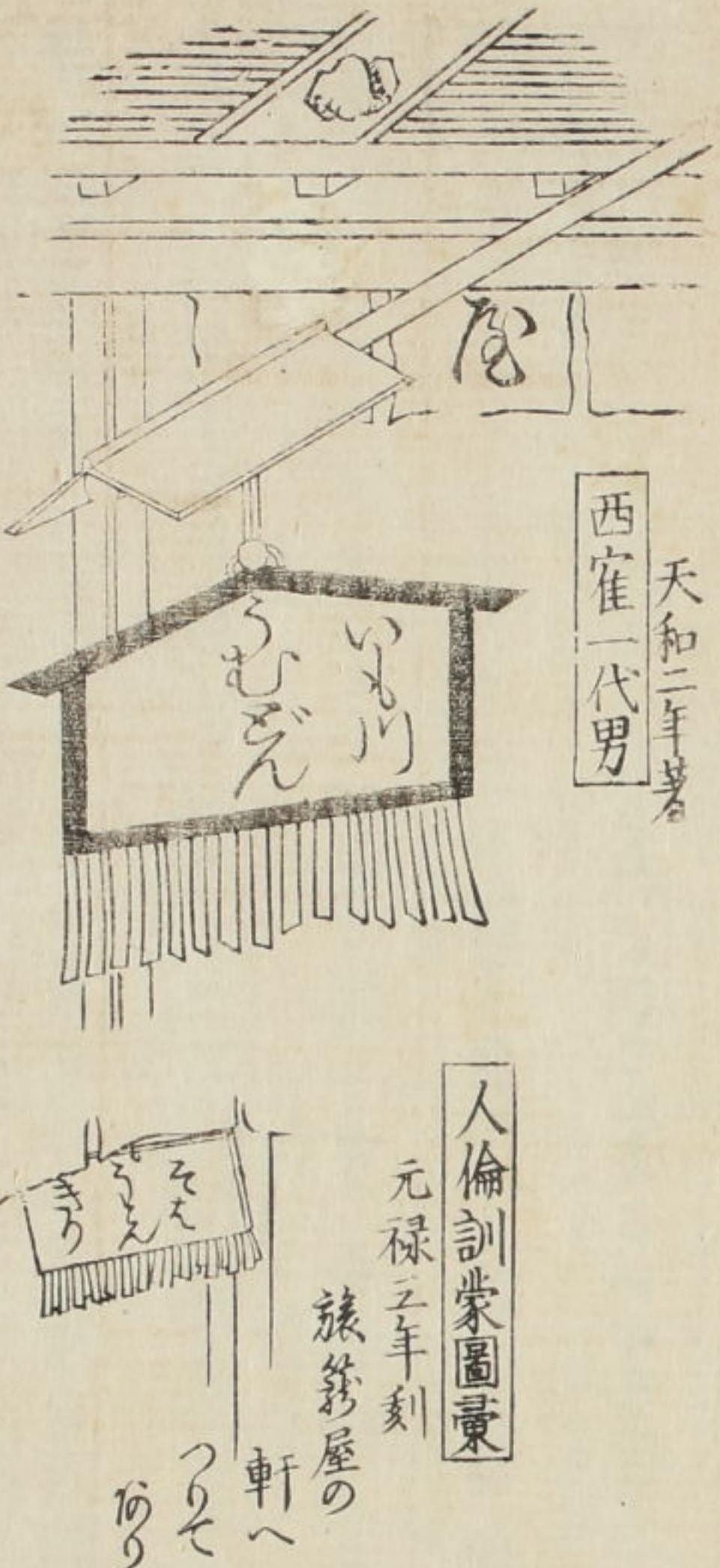
江戸八景のうち
品川の飯帆と
此圖也

人倫訓蒙圖彙

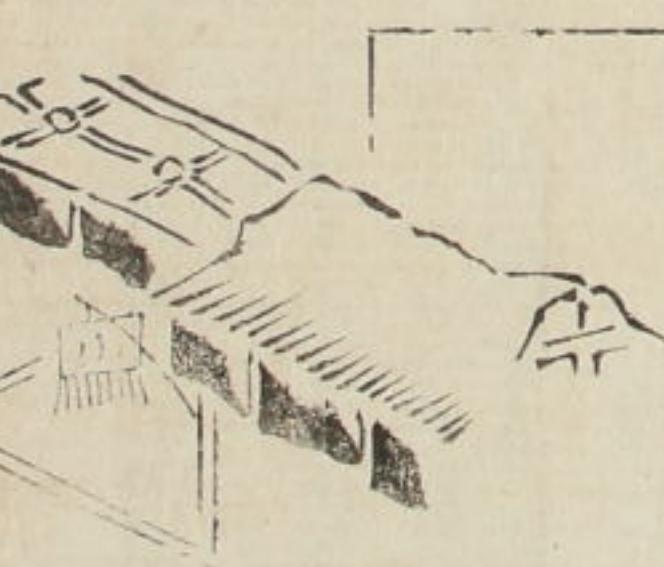
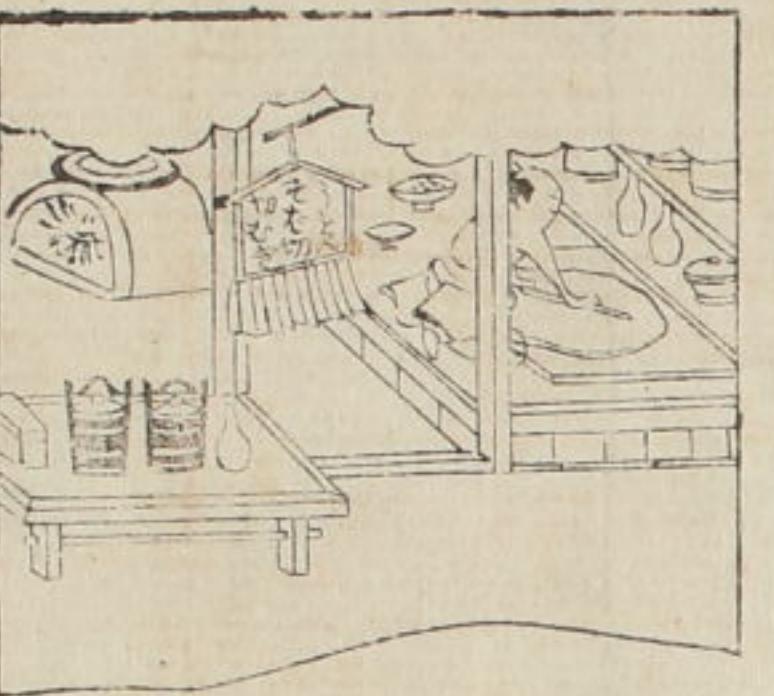
元禄三年刻

旅館屋の

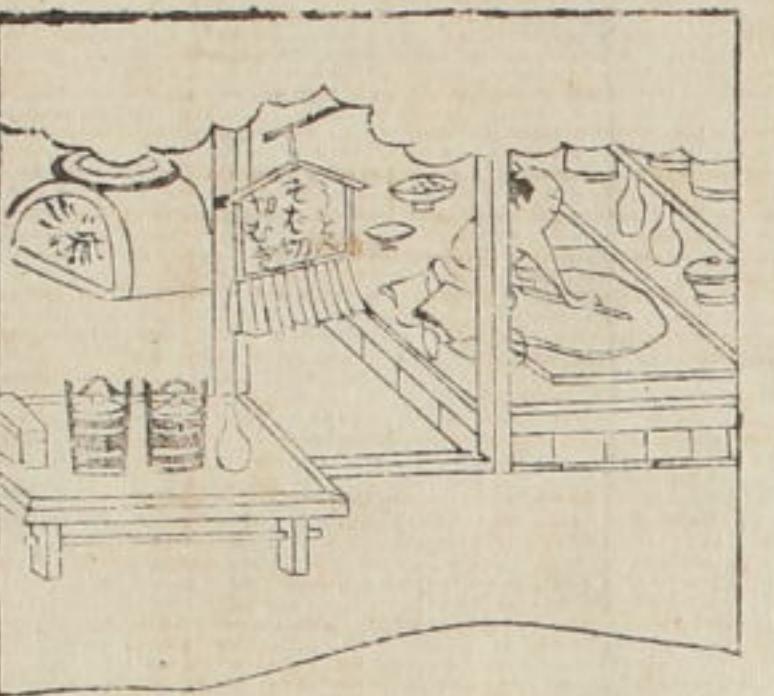
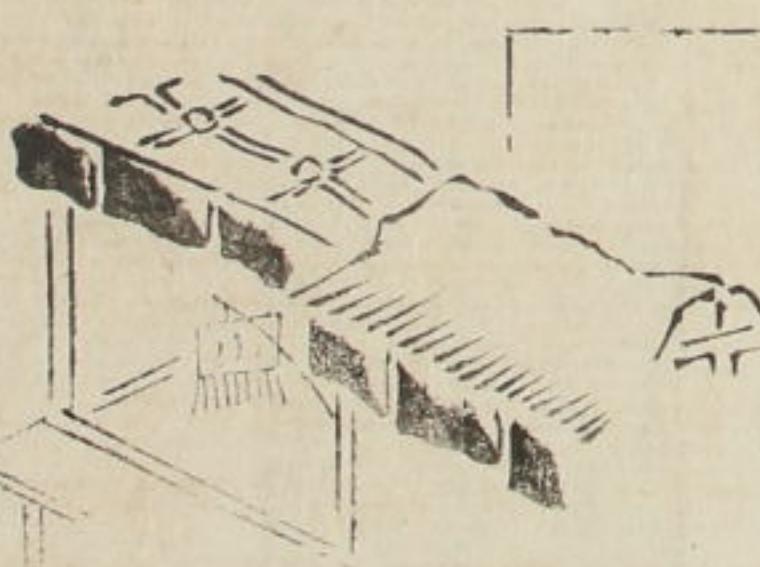
軒



天和二年著
西雀一代男



道戯興
勘板記麺類
朝早鑑花蟹
と記して上よ摸へ
画なり



江戸八景のうち
品川の飯帆と
此圖也

桃の實

元禄六年

おうゆくう温飪屋の幣 冨峯 撰者

吉原へりども不ぞく茶筅髪 嵐雪

とぬもが吉原の温飪屋もは看板のあらじるべ。又按系一代男二の巻かみ第一
摸もつしる画ゑが載のせる條。二川との所か旅宿すみやして云いひりて「芋川」といふ里さと若松

昔の馴染なじみりて人の往むかしする巷きずきとて所の名物めいぶつひう温飪おんぢととてとの事ことを
事ことえ。此冊子より前さき東海道名所記とうかいどうめいし万治元年作まんじ四卷よんせんゆも池鯉鮒ちりふから海うみまで云いひ

の条じょう「伊豆川。うぶんそを切り道中第一の鹽梅しおうめ所ところとあまと今平

温飪おんぢをひもかとひもかとひもかハ芋川の誤ちがひととべ。其そのまの似おなくをうを革かわ綱つなととそ

りを。組革くみかわとひもかべうを。されどひもかとひもかとひもかにも又また」誰神の海ふも

冨士石 延宝七

用捨箱下九五

ひよかと温飪捨水碎く冰ひきのと 調川

題あの春水すい。當時あのくひもかとひもかとひもか。今も諸國の海道かいどうに彼敝かれひもきなる
看板かんばありと。又温飪おんぢの粉こと紙のて扇おひざるややの形かたちを偽いつううべ。鏡餅かみりもちの
勢ぜいある物ものを基もとともと看板かんば田舎いなかととづり

十六 大女房阿与米 附甫春

松會板年代記

近年大女淀瀧よどこうひ見世物みせもの出だへだ。昔むかも彼かれ似おなく女めのを 天和三年
年新彌延宝二年の条じょう「江戸堺町とうさかまちよ四よふ多子力持石臼おとこぢみ小錢こせん四貫文よんげんぶんのせ持もあ。十一月近江國おうみのくにより。よけ七尺二寸しちしゆにん大女おとこ。名なをあよめととく見世物みせもの出だへだとと見え
又續無名抄よつじゆむめいしやう延宝八年上卷じょうぼう八年じょうざん小

近頃道頓堀どうとんぼふ中略頭なかりょうとう太甫春おほひるしととる者ものあり顔おほ常じょう躰たいの如ごくうつうき人ひとふととえり其その身み一尺二寸足脛いっしゆつにんももれて細ほそく四五歳よ四五ふととえむ梅花ばけ心易こころを誦よ粗そつ書しょをよみて義ぎ通つうき又また大女おとこ房ぼうアリ江州こうしゅうの者

あや白鬚大明神の變化なりとひづみ。さけセテ一寸足のみが二尺す。
まのみが二尺。全身まれて骨高く力人ふとえ達者究竟の男也勝れり
きどり事より當時の俳諧ふ大女房とある此よりめぐ事多矣。
かゝるを見せ物ふ出こときのあく丈を高く見せんとそ
足踏をちうせるとあがく下筋足踏の匂小附す

延宝丸歌仙

古足踏猛火とよて燃り下ゆ。

嵐窓

大女房の大蛇いのりく全

西窟大矢教

延宝八

下駄の鼻緒や春雨の空

大女房一丈二尺下ゆ。

向之圖

延宝八

用捨箱 下巻

大女房それ見えらるを富士の雪 如 鐵

杉村治信の画本 古今男

天和四年印本の頭書

書

近頃堺町かべき見よましつひ

小芝居の前を通りへ小友のいふ。ふと保春とあよめとらふ大女房と競て見

をゆく。りやかく。腹とかく事よ。まづ保春がせんの高さをもとすあくらび

大きさ八尺中略天井よそく程ふ高くそ色白されば鹿子まづの富士の如く

保春ハ加僧モ土人形の西行法師よ似ようとあくも

續無名抄の如く彼二人

と反対ふり。梅ふ二代男貞享四の巻下「あり夜又道頓堀の火屋下す法師の

はがき復書して居るを心をとあ見れば甫春より」とらふを見れば甫と保よ作り

古今男の誤りあるべし。其角の著吉原五十四君

貞享四年下

梅ヶえ 櫻木

大女房よめとゆふ。ちんちくアソブ妹小雀とも實よく似より大廣袖の

中より這出ると世の人の笑ひ二本よどみ連づらての道中無用と言べ。阿久きのぞくとひへ。梅え自身のとけひまく。橋本もたけもとを彼かくあふ比て謔一あり

〔十七〕袖頭巾

袖頭巾一名序高祖頭巾といふ物あき草紙さうし又見えぞ宝暦八年の写本愚痴拾遺物語よしふ一兩年以前よりをりき頭巾をやる袖頭巾といふ其原そのは順光といふ坊主品川へ通ふ小高祖日蓮上人のかぎ物より思ひつきてより始め頗光頭巾といひけるとありと記し。又我衣がいふ宝暦元年大坂より中村富十郎といふ若女方下る寒き風を防ぐる爲紫縮緬むらさみ毛帽子めぼしとくらう時のあき女是をかぎりて男もかぎ者より其時の人是を大明頭巾だいめいとゆくて袖頭巾そじゆとかぎり圖ずを載のせ。按ふ順光富十郎ふたりといふ兩説ともふ非なり宝暦元年

角箱くにばこ下卷

トト十八年承喜保十九年印本 櫻鏡さくきょうふ

江戸町二丁目

平野區平野内

うちのく

花盛さかりでそれらしくゆう袖頭巾

さかのく

とおりは草紙さうし吉原より淺草寺の境内へ桜を植うゑ刻の遊女の匂集くわいを此揚あひ千本桜せんぼんざくらといふ奉納ほうのうある遊女の名札なみふき木毎まい小船こぶねてあり故ゆゑを

繪本金龍山牛本櫻

小載こざい圖

画人がいじんハ
奥村政信おくむら まさのぶ



此年号このじねう年号ねんごう見えざれども桜鏡さくきょうと

同時ある事ことハ標題ひだい也

明るりされば享保年間こうほより

此頭巾そじゆなり

此頭巾中頃あさぎハ腮ほまで出るやう不適ふしつを目の下おもふアキ程ほど製せいくと。やあ明和八年めいわ黛山懸前あさひやま附つきうつぶにてあるくと。よふぞえ共とも自昇じせうを用もちる袖頭巾そじゆと附つき。

たるなり。又我衣がいふ記き一如く昔むかハ男もかぎりかぎり一から風俗陀羅尼ふうぞくだらに宝暦十年ほうりゃく小尺竜点集こしゃくりゅうてんしゅう

「りつとうふをやう男の袖頭巾」とうとうり 當世不向語
明和元年印本 買得高
祖頭巾と見えり

〔十八〕追考二條

上巻〔九〕お事の追考 [著聞集] 飲食近ふ「左京大夫顯輔卿のひと或人
はと残してあくらとけふ桃花をうどちむすぶるを僧ともあらうふくらむ
りと二品連歌ふそんじぬりる 春の花え^脱て見せよか
證尊法印づる

さくらむふるふるよべき

とがるを見るふ卿の許ふ集でわざ方僧よ喰せん料も故おとこしてあくらと
と記しるる。わやく俗家ふ此詞うづづく。惜べー連歌不脱なり写誤もある
欲變え難い。おとハ則ニ度目の食。日の長き頃る事も橘のかぎーと
悉て知るふの書建長六年著。前ふ引く〔雜談集〕の作者無住師の若き

用捨箱下

程ふ當てそ時代よく合も。されば上巻みりひー如く事始りに夜食始と云
程の事きべー

中巻〔八〕涙法師の条を再考るふ今下賤の者少女と云まといふ。發意。
傍よ對して尼といふうり桜るよは工も又古ー

守武千句

天文九年

りつう法師のうかび出ま

うけがきこそ人所と知れ

前ハ僧の事きを彼子法師よそりふ。りつう男子の出生せん。きうくも又
きうくも女子うりと附するうべー尼と海士よひしきうかひ出るの縁語ふ
小舟とりひ流したる。少女を巧まとひ俗言みければ匂呼え難い

引ひりへりひひうへる事はのこみあらざれど見るべくまづらむ
べと一条ゑにて筆をそむ

淨書 谷金川

用捨箱下之卷耳



用捨箱下之卷耳

和漢洋書籍發行所

發行者 藤井利八

東京市京橋區南傳馬町一丁目十八番地

發

賣

松山堂書店

東京市京橋區南傳馬町一丁目

松英堂書店

東京市神田區小川町七番地

松陽堂書店

東京市神田區錦町壹丁目十番地

松山堂書店

肆書發

